

2005年(平成17年) NHK Eテレ『わくわく授業 私の教え方』から

私が教頭(週に4コマ授業)をしていた時、NHKのディレクターから連絡があり、Eテレ『わくわく授業』に授業が取り上げられることになりました。ディレクターとの打ち合わせで、テーマが「ペア学習で会話がはずむ!」となりました。答えを言わない、信頼関係のあるペア(ソシオメトリック・テストで作られたペアが母体)で授業に取り組む様子をディレクターがご覧になり、「ペアを特化したドラマ仕様」で、今まで放映されたものとは一線を画することになりました。取り上げるのは、ペア・リーダー(ほとんど、英検準2級、3級を取得)ではなく、英語を苦手としているパートナーたちとし、それにリーダーがどう関わるのかという内容になりました。

私は、今まで9年間3年生の担当でした。教頭として担当したこのクラス(3年1組)の生徒たちも、4月に初めて出会いました。話すことが苦手な生徒が多かったことから、あえて3人で会話を繋ぎ、広げていく「トライアングル(トリオは音楽用語)・ディスカッション」に取り組むことにしました。2人の会話では、話し手と聞き手のバランスが悪くなることがありますが、3人になると2人だけで話をすることはできません。また、聞き手の立場に立ちやすくなります。

放送をご覧になった方々から、次々とメールが届きました。ご紹介しておきます。

●広島県のある中学校の校長先生から電話がありました。

「テレビを見ておまして、いたく感動しました。本校は、ことばの教育の指定を受けていますが、あなたの授業は英語という授業を通り越して、たくさんのヒントをくれました。本校の取り組んでいることと重なるところ、領けるところがいくつもありました。夏休み中に、全職員に校内研修で見せて、その感動を共有したいと思っています。ありがとうございました」

●北原延晃さんからのメールです。

今「わくわく」の再放送を見終えました。眠気が吹っ飛び、さわやかな気分です。

じいになって朝は大丈夫!(実際私の枕元には目覚まし時計がない)と絶対の自信を持っていたのですが、先週の日曜の朝は目が覚めたのが8時をずいぶん回っていました。「見逃した〜!」それから今日までが長かったです。

何年前か「ゆかいな仲間東京大上陸」の懇親会で中嶋さんと話していて、私は奇しくも同じペアシステムを中嶋さんが授業で導入していることを知りました。それから、今の学校で校長から「少人数授業、しかも習熟度別」という指令を受けてだいぶ反発しました。「生徒は教師からだけ学ぶわけじゃないのに。特に英語はコミュニケーションが大切で、どんなに優秀な生徒でもクラス一勉強が苦手な生徒からだって学ぶことはあるのに」

中嶋さんはそんな私に即座に同意してくれました。

「ペアシステムをきちんと確立すれば、少人数と同じ効果を上げることができる」と。

あれから数年経ちました。現在(北原の策謀で)習熟度別授業は名ばかりで、実際は生徒が先生を選んでいきます。「なんちゃって発展コース」「なんちゃって基礎コース」という生徒が大勢います。おかげでどのコースにも英語のできる生徒と苦手な生徒がいて、私のペアシステムは機能しています。

話が脱線しました。NHKの桑山ディレクターから案内が送られてきて、見てびっくり。「スタディ・ペア」「ペアリーダー」「パートナー」という用語まで同じとは!離れていても中嶋さんと私は考えていることは一緒だなと思いました。

実際に放送を見て私は多くの共通点を発見しました。しかし、中には明らかに私のシステムに欠けているものがありました。

放送でスポットライトが当たった生徒達は主に「パートナー」の生徒たちです。要するに英語が苦手な生徒たちです。そういう生徒を番組の主演にしてしまうなんて、中嶋先生は、自信をつけさせるために一番下のクラスを全英連に持っていった長先生と同じ暖かさを持っています。全国ネットということ考えると肩肘を張って精一杯背伸びしてみたくになります。まして過去の中嶋先生の生徒さんを知っている者とすれば、「ペアリーダーの方が見たい」と思うのも無理はないでしょう。

それをそうしないで、あくまでも「パートナー」というスクリーンを通して「ペアリーダー」を見せようとした中嶋先生に脱帽です。

先ほど「私のシステムに欠けているもの」と書きました。それは3年生になって「パートナー」の成長よりも「ペアリーダー」の成長に目が行っていたことです。学校を変えるために、英検などの数値目標を職員会に提案しました。その時点で英検を受けない（まだ受ける力がない）生徒たちのことは少しなおざりにしていたように思います。「過去最高の成績」と朝礼で合格者をほめている私の顔を「パートナー」たちはどんな思いで見っていたのでしょうか。今日の放送を原点にまた初心に戻ってやりたいと思います。

感想よりも反省のようなメールになってしまいました。ペアで見交わす目と目が、教室の雰囲気、中嶋さんがかける言葉がすべて暖かったです。

田尻さんにしても、中嶋さんにしても、こういう教師に出会って私は本当によかったと思います。ありがとうございます。

●田尻悟郎さんからのメールです。

中嶋先生の『わくわく授業』はDVDに落としており、旅先で拝見しました。先生は、「うまくいかなかった」と言っておられましたが、とんでもない。見事でした。

飛び込みで受け持った3年生の5～6月の授業ですよ。私には信じられません。寺岡さんがきちんと編集してくれるだろうと思っていましたが、それ以上に子どもたちの表情が明るい。

協力しようとする積極的な姿勢がまぶしかったです。そして先生の個別指導。テレビを見られた方は、そこらへんをおわかりいただけだと思います。

中嶋マジックは、地道な生徒理解と綿密な計画性の上に成り立つ必然であるということ。

今回、中嶋先生の『わくわく授業』を見て感じたことは、先生の言葉かけの柔らかさと生徒の素直さです。出町の子どもたちは、お互いを受け入れ、伸びていこうとする雰囲気がありますね。吉田君も自己主張をしながら、やるべきことをがんばっていたし、袴谷君と林君のペアも夢中になって活動に取り組む姿がほほえましかったです。

Mama Mia もしっかりと声を出して歌う姿を見ると、生徒同士、そして生徒と教師の間にある安心感と信頼を感じざるを得ませんでした。同じ飛び込みの3年生でもこんなに違うのかと、愕然としました。

私の学校の3年生も、7月には見違えるほど授業に集中するようになりましたが、まだ内容を掘り下げる段階にいつてはいません。英語を操作するドリルを徹底してやりました。先生はリレーノートを

利用されたり、ペア学習で人間関係を深めたりされながら、生徒たちをやる気にさせておられますが、それを見るとやはり考えさせられました。

私も、2学期からは「15歳」らしさを引き出す授業を心がけようと思っています。

あの子たちが、2学期にはもっと深い話し合いに行くのですね。
その前段階としての授業だったことが少しもったいないと思う反面、中嶋先生の生徒さんも1学期は食べ物などのトピックで話し合いをしているんだと思って安心された先生方もおられたのではないのでしょうか。

でも、本当は「人間関係作り」という、もっともっと大切なところに視点があるのだということに、気がついてくれる先生が多くいるといいですね。

もう一度見てみます。
見るたびに新しい発見があると思います。
ご苦労様でした。

●本校の保護者からいただいたメールです。

放映以来、ますますお忙しい毎日をお過ごしのことと思います。
そのことを知りながらも、ただ我が子もこのすばらしい授業を受けさせて頂いていることを嬉しく思い、メールで失礼かとは思いましたが一言お礼申し上げたくお便り致しました。ご返事のお心遣いはありません。

この春の我が子の入学以来、出中の子どもたちの様々な情報が聞こえてきて、大変心配しておりました。「どの生徒もきっといい子に違いない。きっと何か満たされないものがあるのでは…」と思いながら今日に至りました。今の出町中学校のことをよく知りもしないで…とお感じになったらお許しください。

番組を拝見し、先生の授業に対する姿勢やお考えそのものに解決の手がかりが込められているように思えてなりません。あの授業にはさすがらしい緊張感がありました。クラスメートの連帯感も感じました。

さらに、先生の生徒に対する信頼感、それに一生懸命応えようとしている生徒の姿勢がよくわかりました。子どもたちが、お互いの違いを認め、励まし、助け合っって一つの目標に向かって努力している姿に友だちの温かさを感じました。きっと、このクラスはこの授業を通じて、まとまっていくんだろうなと思いました。そして、きっと英語も学校ももっと大好きになるはずだと思いました。

私自身も中学生時代にタイムスリップしたひとときでした。
私たち親も、もういちど、もっと考えなければ…そう考えさせられました。
すばらしい授業をありがとうございました。

●文部科学省の前調査官からのメールです。

見ました。素晴らしい授業でした。中嶋さんの「わくわく授業」、いやむしろ出町中学校の生徒さんの番組でした。生徒たちの成長をしっかりとカメラに納めたNHKの番組制作の力量にも、正直、感嘆しました。

中嶋先生の出番は少なかったですね。でもあの恵比寿様のような笑顔が生徒たちを常に励ましていました。おなじみのさまざまな指導技術は披露されませんでした。それらの裏付けである生徒観、授業観を、あの生徒たちが見事に伝えてくれていたのではないですか。

拍手を、そして最敬礼を贈ります。
有り難うございました。

●友人が、他県の指導主事からいただいたというメールを転送してくれました。

それにしても中嶋先生はすごい。ふつう、テレビに出るとなると、カッコいいところばかり見せたくなるものだろうけれど、本当に生徒の目線で接し、自分の力を見せつけようとしていない。でも、だからこそ、彼の人間性とか、すばらしさが伝わってきた。

見せるだけなら、もっと別バージョンのことをいくらでもできるだろう。
書籍やビデオやDVDで、あれだけの実践がある人だ。
だが、今回、なぜトライアングル・ディスカッション（初めての冒険）だったのか、それもペア学習とのコラボレーションだったのか。

そこに、視聴者へのメッセージが潜んでいるのではないだろうか。
それを読み解くのが、私たちの仕事なんだろうと思う。

しかし、4月からの出会いで、5月下旬の撮影というのは驚き！

●T大学の助教授からのメールです。

中嶋先生にはいつも勉強させて頂いています。今回の放映を見て、中嶋先生は、いつまでもずっと教室にいて頂きたいような気がしました。

悉皆研修が始まり、私のようなものも講演がかなり多くなりましたが、今年に入り、上司の先生から「普通の研究者はせいぜい講演は年に1回か2回で、それを超えるとビジネスマンだ」と諭されました。

社会・現場貢献などと思うところもあったのですが、わくわく授業を見ていて、やはり、授業が原点だなと思いました。

名誉助教授になってしまいそうな私にとって、今がこらえどころなのかもしれません。英検派遣講師も断り、他のご依頼も少しずつ減らし、ゼロとまではいきませんが、来年度からはせいぜい年に数件で収まるようにと努力してみたいと思います。

●他県のある指導主事の方からです。

おはようございます。今朝放送になった、NHKの「わくわく授業」、見ました。

信頼関係でしっかりと結ばれたペアによる「教え合い」、「学び合い」。リーダーが教師顔負けのコメントをし、仲間を励まし、また、自分の至らなかった点にも気づきながら学習を進めていく姿に、素直に感動しました。

またトライアングル・ディスカッションを通じて、「コミュニケーションとは何か」を体験的に学び、相手の話に関心を持って聞く、話す態度を生徒が少しずつ身に付けていく姿にも心打たれました。(本当に、教師は生徒の影に隠れていて、出て来ていませんね！)

最後に中嶋先生が生徒に向けて語りかけておられた「これで終わりではないよ。皆はまだまだ途中の段階にいて、これからもっと表現を磨いていくんだよ。そして、本物のコミュニケーション能力を身に付けていくんだよ。」というメッセージを、真剣なまなざしで受け止めていた生徒たちの姿の中に、これからの成長の可能性の大きさを読み取りました。

「英語」を通して、生徒自身が課題を見つけ、学び合い、助け合い、人間関係を豊かなものにしていく、そんな、中嶋先生の教育の原点を垣間見ることの出来た番組でした。

きっと、メールが殺到していることと思います。
私の感想は、短くまとめさせていただきました。
今後の展開を、1ファンとしても、楽しみにしております。

●愛知県の方が、あるMLに投稿されたものです。

今年の4月から勤務先が国立教育政策研究所にかわりました。菅先生と平田視学官、太田調査官と同じ部屋で仕事をさせてもらっている幸せ者です。もちろん立場はちがって、教科調査官の先生方とも協力して、いろいろな調査を準備したりまとめたりすることのお手伝いをしております。残念なのは、現在授業ができないということです。

今朝は7時40分からNHKの「わくわく授業」を見ました。もちろん録画の予約もしてあったのですが、目が覚めてテレビの前に。懐かしい中嶋先生の顔や声が。一昨年2月の勉強会でお会いしたときの、あの感動がよみがえってきました。

25分間の番組中、中嶋先生が映ったのは5分間もなかったでしょうか。
さすが中嶋先生。(さすがNHK。)

テレビに映っている生徒達が中嶋先生の指導を感じさせます。主役は生徒だということを見ている人に十分伝えていて、それが中嶋先生の考えの中心なんだな、とわかります。最後の speaking と talking の違いが象徴しているなあと感じました。

一昨年勉強会でも、中嶋先生が話されることを私たちが聞くというより、中嶋先生のしくんだ活動に楽しく参加するうちに、自分の指導の問題点に気づき、ペアとお互いに話し合い、改善点を見つける。そんな講座でした。

最後にちらっと映った歌の指導だけでも何冊か本を書ける中嶋先生。中嶋先生のわくわく授業がシリーズで続いてくれたら、と願っています。

今、録画したものをもう一度家族と見ています。一度目は気づかなかった details に気づいて、ここはどうなっているんだろう？と疑問がたくさんわいてきました。何度も見たいと思わせる番組です。ペア学習に触発されて、これを仲間と見ながら、お互いの気づきをシェアしたり、自分の経験や疑問を交換したりといったことがしたくなりました。

これも中嶋先生が仕組んだことなのでしょう。マジックです。

●広島大学の助教授のHPへの投稿です。

見ました。といっても朝に弱いので録画して、ですが。放送で紹介された部分に関して言えば、すでに「英語」の授業ではないなあ、という感想です。

「コミュニケーション」というか、人との関わり方を教える活動を、たまたま英語でやっている、という印象を受けました。

「先生 Q&A」のページにもあるように、「英語」の部分はそれとしてトレーニングを重視されているということなので、今回のものはあくまで一つの「極」なのだろうとは思いますが。

それにしても、今回の放送では「英語は他者の思いを受け止め、自己の思いを伝える道具」というシンプルな方向性（あるいは英語の定義づけ）が見て取れるように思われました。

「そうだ。英語の授業なんて単純なことじゃないか。もっとシンプルに発想しようよ」などと一瞬思ってしまったのですが、シンプルを実践することがいかに難しいか…。

たぶん、25分という放送時間の中に私には「見えども見えず」のヒントがまだまだ転がっているのだろうと思います。

●県内の先生からです。

「英語の授業を通して人を育てる」という教育の原点を再確認させられました。授業の最後で先生が言われた Get it? に対して生徒たちが Got it! と答えた場面では、温かい先生と学習集団の雰囲気が伝わってきて感動のあまり、しばらく身体が固まってしまい、何も手に付かず、結局番組の録画を3回も見てしまいました。

speaking と talking の違いについてについて中嶋先生が語られたお話の中で忘れられない言葉があります。「相手の言うことをよく聞いて、こんなことを言いたい」と自分自身のメッセージをもつことの大切さ。「今はゴールではなく通過点。もっと表現力を身に付けてこの人と話をしたいという魅力ある人間になって欲しい」という先生の願いは録画を見直すうちに番組の日々の授業の中で、すでに生徒さんたちに伝わっているのではないかということにも気付きました。

花島さんの「頑張れば大丈夫!」「カタコトだったけど伝わったよ」という励まし。吉田君が本番の発表席に向かう途中どこからともなく聞こえてきた「がんばれ!」の声、練習中にペアリーダーが必死になってパートナーを指導する様子、そしてパートナーたちが自分の悩みや疑問を素直に打ちあけることのできる人間関係、安心して学ぶことができる温かいクラスの雰囲気を作り上げられるまでに、きっとテレビには現れていないたくさんの指導と支援があったのではないかと思います。

思わず画面に向かって拍手を送りたくなつた瞬間がいくつもありました。英語に苦手意識をもっていたはずの美濃さんはショートケーキの話題で立て続けに4文もの英語を話すことができました。自分でも気づかぬうちに比較級を使っていたことをペアリーダーから指摘され、照れながら笑顔で喜んでいた吉田君。また吉田君は本番中に自分と同じ考えをもっていたとなりの生徒に Me, too. と言いながら握手をしていました。綿密なマッピングとナンバリングを用意して「すし」の話題を必死になって練習してきた林君は結局果物の話題で自分の言いたいことを十分に言えませんでした。不意に友だちに Pardon? と聞かれたときに出てきた Why don't you ~? の文。彼らの頑張りに具体的な点を指摘しながらよくやっとなつたと肩をたたきペアリーダーたちの姿に Mr. Nakashima Jr. を感じました。

現在、私も3年生の授業でsmall talkと今日先生が見せてくださったtriangle discussionに取り組んでいます。方法は違うかもしれませんが、小さな学校でささやかに授業をしていた私を見つけ、育ててくださった心の師匠と、今同じゴールを目指して仕事ができる自分が幸せでなりません。親や子供たちの表面的な願いだけを過剰に意識して、技術的な指導に偏りがちだった自分をもう一度振り返り「英語を通して人を育てる」ことをさらに意識して子供たちとふれあっていたいと思いました。

●県内の先生からです。

「わくわく授業」楽しく拝見させて頂きました。

今回はあえて、どの教室にでもいそうな普通の生徒（あえていえば英語の苦手な生徒）にスポットライトが当てられていました。

彼らがトライアングル・ディスカッションをしているときには、一緒に手に汗握る思いでテレビを見ていました。

やり終えた後の何とも言えないうれしそうな表情がとても印象的でした。

これまでの番組スタイルは、優れた先生の指導法やテクニックに焦点が当てられていましたが、今回はむしろ生徒さんが主人公という感じで、20分間のドキュメンタリーを見ているような気がしました。

そこには、先生が「あれもこれも教えなきゃ」と必死になっている姿はどこにもなく、一人一人に合わせてじっくりと育てておられる姿がありました。

英語という教科を通して、「人と人の関わり」、「魅力ある人間づくり」に取り組んでおられ、また、生徒と先生が一緒になって一人一人の成長を楽しんでおられる様子が伝わってきて、見終わった後に、あったかいものが心に残りました。

先生の授業を拝見させて頂くたびに、「自分もこんな授業をしてみたい」という気持ちが湧き上がってきます。

少しでも中嶋先生に近づけるようにがんばりたいと思います。

中嶋先生の授業を受けた生徒は、本当に幸せだと思います。

●「富山の仲間たち」という5県の先生方が入ったMLでの投稿です。

富山で中嶋先生の授業を見せていただいたとき、なんだか胸がいっぱいになって涙が出てくるほどでした。ペア活動がとてもうまく機能していて、生徒たちは見学にきている見知らぬ人物たちである私たちにも集中力をそがれることなく、授業に熱中していました。

今回のわくわく授業でもやはりペア学習の効果が際立っていたように思います。

以前、中嶋先生に授業を見せて頂きました。授業前の中嶋先生は普段の柔和な顔つきではなく、「ペア活動のときが一番神経を使う」とおっしゃっていた通り、緊迫している感じを受けました。ペアがうまく機能すれば、ペアリーダーが先生の役割をしてペアパートナーをサポートするので、軌道に乗せてしまえばペア活動のほうが教員の負担は減るのでは、と思っていた浅はかな私は、富山で実際見せていただいた授業、そして今回の番組を見せていただいて改めてペア活動の奥の深さ、そしてその指導にどれだけの配慮が必要かということを感じさせられました。

一方的に先生が説明し、聞くだけの授業か、ペアで助け合って学びあう授業か、どちらがいいかと聞けば、生徒は後者を選ぶでしょう。ただ、その指導法を教員自身がしっかり把握していなければ、うまくいくのは最初だけで、いずれうまく機能しなくなってしまうと思います。英語の得意な生徒が苦手な生徒に教えることによって、教えられる生徒だけでなく教える側にも力がつく、といくらいつても、教員でも指導の難しい英語嫌いの生徒に教えるのは、並大抵気持ちではできないと思います。ペアリーダーになるくらいの生徒であれば、肥料さえ与えられればどんどん伸びてゆくので、そこでどんな肥料、指導をするかが鍵になってくるのではないのでしょうか。ペアリーダーを廊下に出して、彼らの悩みを聞き、それに対して決め細やかに助言されているのを見せていただき、そう思いました。

後、改めて大切だと思ったのは教員自身の資質です。あたりまえのことかもしれませんが、教員自身がいかにか魅力的であるかが授業に直結しているように思います。中嶋先生の話される一言一言はいつも深みがあり、聞いている人を惹きつけます。荒れていた学校での怪談の話をきっかけに、その語り口を勉強されたということですが、先生自身の信念や人柄から人は中嶋先生の話に引き込まれるんだと思います。英語の教授技術のみならず、人間的にまだまだ未完成なので、アンテナを高くしていろいろな経験を重ねながら、もっと人間的に魅力ある教員になりたいです。

●県内の先生からのメールです。

わくわく授業の放映直後は、きつとかなりのメールがあったことと思います。教頭先生として学校の運営をされながら、あれだけの実践をされる先生を、本当に尊敬いたします。

英語教師というより、私はむしろ他の教師の方々に、見てもらいたいと思いました。映像から「生徒のみんなにこうなって欲しい、英語学習を通してこう成長して欲しい」という思いが伝わってきましたが、自分自身も同じような気持ちで、日々授業に臨んでいます。先生のようにペアリーダーを育て、高め合う集団をつくるどころまではまだまだ到達できませんが・・・

中嶋先生の影響を受け、「授業の中の生徒指導」や「人間づくり」という視点で英語の授業を考えようとする先生も出てきたのではないのでしょうか。(自分もそうですが)

だからこそ、知識の詰め込みに偏りがちな教科や、古い教材を使い、マンネリ化した授業を繰り返す先生方に、是非見てもらいたいものだと思います。自分の意見を持つことの大切さ、それを伝えることの大切さ、そして伝えるための方策等、これから、社会で生きていくために、すべてが必要となってきます。

「帯学習」の効果に皆さん気づかれたのでしょうか。自学ができるように(しつけを含めて)、私も12年間やってきて、この良さや方法を勧めても、市内でも結局数人しか取り組んでもらえません。先生の番組をきっかけに帯学習に本気で取り組む先生が増えてくれることを期待したいと思います。

また、今年度は私も授業の最後に歌を入れていますが、あれは修学旅行のミュージカルのマンマ・ミーアですね?実は全く同じでした。6月はThank you for the music で授業が終わりましたが、休み時間でもみんな歌っていましたね。生徒の実態や興味に合わせた歌を選択するのが一番ですね。

「だから英語は教育なんだ」と思います。出町中学校のH先生と部活動の関係でお話したことがありました。中嶋先生が出町にいらっしゃる間にたくさんの方のことを教わりたいと意欲的でした。他の教科の先生、他の地域の先生、いろんな方々が先生から学んでいます。学んだことを、次の先生たちに広げていくのが、私たちの仕事かなと思います。

●他県の若い先生からです。

中嶋先生のわくわく授業を、ようやく拝見しました。1度目、月曜日に家族と共に見ました。生徒たち一人一人の魅力的な部分がたくさん映されていて、感動する場面がたくさんありました。

なぜこんなに見ていて気持ちが良い、うれしくなるのだろうか・・・。
胸が熱くなるこの感動はどこからくるのだろうか・・・。

その謎を解くため、火曜日、水曜日と再度見ました。そこには、特に 3 組のペアが映し出されていました。花島さん美濃さんペア。袴谷君と林君ペア。臺蔵君と吉田君ペア。パートナー、ペアリーダーと分かれていますものの、パートナーさんが自分に劣等感を持っている様子もなく、またペアリーダーさんが得意げに答えを押し付けていることもありませんでした。そこにあったのは、悩みを打ち明け、一緒に考え、一緒に伸びようとし、一緒に成長を喜ぶ気持ちでした。

放課後、「(パートナーさんが) 言いたいことが英語で出てこない、大きな声が出ない」と悩みを打ち明けていたペアリーダーの袴谷君と、パートナーの林君が、中嶋先生に相談に来る場面があります。そこで感動的なシーンがありました。それまで、言いたいことが出てこないというパートナーの林君の問題を、袴谷君は、林君自身の問題として捉えていました。

ところが、中嶋先生のお言葉で、袴谷君は、自分が質問することで林君の言いたいことが引き出せるということに気づきます。パートナーの問題を自分のこととして捉えた瞬間です。中嶋先生は、決して、袴谷君に、「君が林君の言いたいことを引き出してあげればいいんだよ」ということはおっしゃいませんでした。「具体的に質問してあげれば、あっ、こんなことも言えるのか、ということが分かる。言いたいことが分かれば、それが自信となって大きな声が出てくるんじゃないかな」という投げかけをされていました。そして袴谷君は見事にそれを受け止め、自分で気づいたのです。「相手の気持ちを考えずに、自分がこうすればいいということを林君に押し付けていた。もっと話聞いてあげんと。ごめんね。ごめんね」と。気づいた生徒さん、とても素敵です。

私も、押し付けではなく、人間として大事なことに気づかせてあげられるような、中嶋先生の優しく深い視点を身につけることができたらと思います。廊下での花島さんとの面談の中でも、中嶋先生の、生徒に対する優しく深い目線を感じました。中嶋先生は、「美濃さん、英語がどんどん好きになってるよ」とパートナーさんの現状をしっかりと伝えた上で、「1 つだけお願いがあるんだけど」と優しい口調で花島さんをお願いをされました。

ペアリーダーの花島さんは、きっと、先生のお言葉で、自分の存在が認められ、人の役に立っていることを間接的に感じ、嬉しかったことと思います。その上で今後のヒントをもらい、「よし、美濃さんのためにも、自分のためにも、もっと頑張ろう!」という気持ちになったことと思います。

中嶋先生は、「どの子もいいものを持っている。」という絶対的に生徒を信じる強い気持ちや、それを引き出す御姿勢が、根を張っているように感じました。そして、仲間 (パートナーさん) の成長を、自分のこととして喜ぶクラスの風土を作り出すしかけや言葉かけを、とても大切にされていると思いました。

コミュニケーションの根底にある大切なこと、相手を思いやる気持ち。本当に、確かに、「相手にこんなことを伝えたい、言ってあげたい。」という思いや「相手を思いやる気持ち」がなければ、コミュニケーションは続きませんし、乾いた寂しい (時につまらない) ものになると思います。まず、自分自身が、相手の話すことに興味を持って聞き、返せるように、魅力的な人間でありたいと思います。中嶋先生の生徒さんが輝いている秘訣を探り、私自身も、私の生徒たちも今以上に輝けるように、また明日から頑張ります。

メールを読むと、「なるほど、そういう見方もできるか!」と気付くことがよくあります。多様な視点を学べるからこそ、楽しいのだと思います。授業も同じです。多様な意見、多様な気付きがあるからこそ、授業に深まりが生まれてくるのです。

そして、教師という仕事は、最初はきちんとノウハウを指導し、できるようになるまで徹底し、最後には、生徒が「自らできた、やった」と思わせられるよう、後ろからそっと背中をひと押ししてやるものではないか、と思います。

番組の背景情報】

- 1 3週間の取材（6時間の授業を収録、3時間のインタビュー）
- 2 ねらい：ペア学習で人間関係を構築しながら、コミュニケーションに関心をもち、協力し合って問題解決（トライアングル・ディスカッション）をしていく様子を伝える。
- 3 収録で対象とした生徒（ペア）
 - (1) 仲の良い、ほのぼののペア（放映では野球部のペア。多くのペアの代表）
 - (2) 中1、中2と不登校で英語が1年生の内容しかわからない女の子（出る授業を選んでいる）と、その子が指名したペアリーダーとのペア
 - (3) 中2から問題行動が多く、集中できない男の子とその子が指名したペアリーダーとのペア

なぜ、彼らがペア学習ならやる気になるのか、何が要因になるのかを、ペアリーダーたちのサポートを通して紹介しようと思いました。ペアリーダーたちが、トライアングル・ディスカッションで活発に意見を述べる様子を紹介することは、当初から対象外でした。

また、対象が仲のよいほのぼののペアばかりでは、深まりが生まれれないということから、(2)と(3)の対象が選ばれました。いずれも生徒の了承を得ました。

編集の段階で、ディレクターから

「(2)の生徒がずっと不登校（保健室登校）だったことをナレーションに含ませたい」というリクエストがありました。そうしないと、「視聴者に、番組のねらいが伝わらない」ということでしたが、それは諦めてもらいました。

4 エピソード

トライアングル・ディスカッションの練習日（本番前日）、(2)の女の子が友人と一緒に授業を拒否して逃走。理由は、人前でしゃべるのが怖いということ。しかし、カメラマン2人、音響2人、ディレクター、生徒たちはきつと戻ってくれるだろうと、15分間ずっと静かに待っていました。教師たちのサポートで教室に戻った彼女は……。それが番組で見せた涙の理由なんだろうと思います。

5 メイキング

(1) 今回の内容について

25分番組ですので、今まで、DVD等でご紹介してきたような focus on form に類する1時間の授業は無理だと判断し、ちょうど5月の下旬ということで、ペアを育てる最初の地道な取り組み、並びに帯学習（最初の5～10分の活動）や output に向かって継続的に指導をする様子を紹介しようということになりました。

トライアングル・ディスカッションは、茨城県で行われているインタラクティブ・フォーラムに近いもので、3人が即興で対話を行えるように、ペア学習で助け合って練習をしていくというものです。（年度当初の取り組みですので、内容的にはとても稚拙です）

ただ、私は、マイクロ・ディベートとこのトライアングル・ディスカッションが中学校や高等学校の「聞く・話す」領域の到達目標になるのではないかと考えています。

到達目標が具体的なものであればあるほど、活動も教師の指導も評価方法も、そして何よりも系統性が見えてきます。

今の英語教育に欠けているのは、この全体構想力（教師の専門性に裏付けされた教材観、4技能をどう高めていくかというビジョン）ではないかと思っています。

4月になって初めて出逢った生徒たちは、2年次に Show and Tell などのスピーチを経験していないということから、やや無謀かとは思いましたが、問題提起になればと思い、敢えて挑戦してみました。

トピックは3種類(Which is better to live, in the town or in the country?

What is the most important thing for you?

What is your favorite food?)

用意しており、その中から3人で1つ選ぶというものでしたが、どのグループも my favorite food を選んでしまいました。

とっつきやすさと、話すことへの自信のなさが影響していたのだと推察します。

my favorite food は、small talk ではそこそこ話せても、3人になるとあまり深まりが出ないし、広がりにくいということがわかりました(苦笑)。実態を捉えきれなかった私のミス。もう、後の祭りです(笑)。

my hobby のトピックで4月にスピーチをさせ、それに対して質問を書かせ、ペアでの small talk で質問をしあう、といったプロセスを経て、3人の talk に入っていけば、話題を発展させることができたのでは、と今になって、反省することしきりです。

NHK側からの「番組的に動きがほしい、子ども同士の葛藤やそれを乗り越えるドラマがあれば・・・」という要望をうけて、舞い上がった状態で実態把握もそこそこに理想を追いかけたのが失敗でした。実際、授業の収録が始まり、毎時間2台のテレビカメラが私の真横で回り始めると、自分を見失ってしまい、冷静に分析することができなくなりました(笑)。13年前に同じNHKテレビ(中部日本)が取材に来られた時は50分間だけだったので、結構気楽だったのですが・・・。小心者です(笑)。

(2) ペアを育てること

ペア学習という点ですが、『わくわく授業』担当の寺岡ディレクターさんと相談して、原点に帰るつもりで、トライアングル・ディスカッションに向けて、ペア学習(ペアで支え合って学習を展開する)に焦点を当てた授業ー初めて出逢った生徒たち(3年生)と人間関係を構築し、生徒たちが地道にペア学習に取り組む様子を伝えるーにしようということになりました。

居心地のよい雰囲気が作られる中でコミュニケーションの大切さ、楽しさに気付いてくれるような授業にできたらと考えましたが、4月20日に父が亡くなり、忌引で1週間休みをとった関係で、ペアを組んだのが5月の中旬で、結果として番組収録をしながら、育てていくというスタイルになりました。

今まで、ある程度仕上がった形ではお見せしたかと思いますが、最初の土台から育てていくという部分を、ご紹介するのは初めてかもしれません。最初、生徒たちはひいていました(シーンとしていた)し、指導も、途中、結構どろどろしています。2台のカメラ、2本の音声マイクを意識して緊張しており、1週経っても、2週経っても、気持ちが乗ってこない生徒たちに、若干焦りも感じました。

しかし、寺岡ディレクターさんとメールをやりとりしたり、毎日電話で確認し合ったりして、共に構想を立て、積んでは崩し、また積み上げていくという作業を行いました。授業を収録した後も、順次修正を加えていくという3週間の行程で、最後の最後にやっと生徒と気持ちが通じあえたかなと感じました。

(3) プロから学んだこと

途中、収録のない日の授業分も含め、連続15時間分の授業案(計画)を書いたのは初めてのことで、貴重な体験となりました。そして、何よりも、いい映像を求めて、飽くなき追究をするプロの凄さを思い知らされました。寺岡さんから学んだことは多いのですが、次のようなことは現場の教師として、ショッキングなことでした。

- ① 打ち合わせで5月12日に来られたとき、ペアの座席表に写真を貼り、名前を入れたものが欲しいと言われました。ディレクター、カメラマン2人、マイク担当2人の5人が、1週間で名前を全部覚えてくるのだと言われました。つまり、誰がどこにいて、何をしているかを即座に判断して、映像になる瞬間を追いかけるためだそうです。ドキュメンタリーは、刻々と変化する流れを、瞬時に読み取らなければダメなのだそうです。
- ② 1週間の間があいた時、東京から12人の生徒の電話番号を担当に尋ね、保護者の了承を得た上で、現在の状況をリアルタイムで聞いておられました。
- ③ 生徒へのインタビューで、「次、何をやる予定なの」と尋ね、それをヒントに誰と誰をどうつなげるか、はたまた朝や放課後の場面などの構想を果てしなく広げられました。
- ④ 収録後、8時間分の映像を1週間かけて25分番組にするためにカット・アンド・ペーストの編集作業に入られました。最初に、映画のように絵コンテを描き、デジタル編集機で、100分の1秒単位のコマ映像をつなげたものを、納得いくまで何度も作り直されました。最後に、BGMやナレーションを吹き込まれました。

どれもが、番組づくりに必要不可欠な要素だと言うことですが、特に私は①～③のような実態把握(診断的評価)が現場の教師にとって必要なあ、と実感しました。

